

「神なき世界」の救い

丸山 勉

【聖書】創世記 37 章 18～36 節

兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフを殺してしまおうとたくらみ、相談した。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えよ。あれの夢がどうなるか、見てやろう。」ルベンはこの話を聞いて、ヨセフを彼らの手から助け出そうとして、言った。「命まで取るのはよそう。」ルベンは続けて言った。「血を流してはならない。荒野のこの穴に投げ入れよう。手を下してはならない。」ルベンは、ヨセフを彼らの手から助け出して、父のもとへ帰したかったのである。ヨセフがやって来ると、兄たちはヨセフが着ていた着物、裾の長い晴れ着をはぎ取り、彼を捕らえて、穴に投げ込んだ。その穴は空で水はなかった。彼らはそれから、腰を下ろして食事を始めたが、ふと目を上げると、イシュマエル人の隊商がギレアドの方からやって来るのが見えた。らくだに樹脂、乳香、没薬を積んで、エジプトに下って行こうとしているところであった。ユダは兄弟たちに言った。「弟を殺して、その血を覆っても、何の得にもならない。それより、あのイシュマエル人に売ろうではないか。弟に手をかけるのはよそう。あれだって、肉親の弟だから。」兄弟たちは、これを聞き入れた。ところが、その間にミディアン人の商人たちが通りかかって、ヨセフを穴から引き上げ、銀二十枚でイシュマエル人に売ったので、彼らはヨセフをエジプトに連れて行ってしまった。ルベンが穴のところに戻ってみると、意外にも穴の中にヨセフはいなかった。ルベンは自分の衣を引き裂き、兄弟たちのところへ帰り、「あの子がいない。わたしは、このわたしは、どうしたらいいのか」と言った。兄弟たちはヨセフの着物を拾い上げ、雄山羊を殺してその血に着物を浸した。彼らはそれから、裾の長い晴れ着を父のもとへ送り届け、「これを見つけましたが、あなたの息子の着物かどうか、お調べになってください」と言わせた。父は、それを調べて言った。「あの子の着物だ。野獣に食われたのだ。ああ、ヨセフはかみ裂かれてしまったのだ。」ヤコブは自分の衣を引き裂き、粗布を腰にまとい、幾日もその子のために嘆き悲しんだ。息子や娘たちが皆やって来て、慰めようとしたが、ヤコブは慰められることを拒んだ。「ああ、わたしもあの子のところへ、嘆きながら陰府へ下って行こう。」父はこう言って、ヨセフのために泣いた。一方、メダンの人たちがエジプトへ売ったヨセフは、ファラオの宮廷の役人で、侍従長であったポティファルのものとなった。

【序】「神」が出てこない 37 章

今月と来月は旧約聖書の「創世記」のヨセフ物語を味わうことになっています。初めは二ヶ月もかけてこの箇所を取り上げるのかと思いましたが、じっくり読むのは意味があると改めて思いました。やはり聖書というものは、このような「物

語」の中にも、鋭く私たちに問いかけてくるものがあると思います。

今日は 37 章の後半です。18 節から読んで頂きましたけれども、実際は 12 節からです。17 才であった少年ヨセフ。彼はお父さんのヤコブの 11 番目の子供でしたけれども、愛妻ラケルとの間に生まれた最初の子、また年取り子でもあって、どの息子よりも可愛がった、と聖書は書いています。裾の長い晴れ着さえ彼に与えました。他の腹違いで生まれた兄たちは面白いはずがありません。しかもヨセフは無邪気にも自分が見た二つの夢を兄たちに聞かせたのですが、その内容と言うのは、兄たちがやがて自分に頭をさげるようになるということを暗示したものでしたから、「ヨセフをますます憎んだ」と書いてあります。

そして今日のところですよ。羊を飼うためにシケムにいた兄たちが、父に言われて兄たちの様子を見に行けといわれたヨセフと野原で会い、こともあろうに、偶然にもやってきた、エジプトに向かおうとするイシュマエル人の隊商にヨセフを売りつけてしまおう、という話がこの章の 12 節以下に書いてあります。そしてヨセフはエジプトに売られていってしまいます。そして、兄たちは父ヤコブに「ヨセフは獣に襲われたことにしよう」と、ヨセフの着物に雄山羊の血を塗り、ヤコブを騙すわけです。父ヤコブはそのまま信じて、いたく嘆いたという話が 37 章後半に記されています。

この 37 章について、ある牧師先生がこのようなことを説教の中で語られていました。——「この第 37 章を読む限り、そこには神様の恵みによる救いのみ業などどこにも見られません。それどころか、ここに語られているのは、人間の罪と、それによって引き起こされた悲惨な出来事ばかりです。そもそもこの 37 章には「神」という言葉が一度も出てきません。ここに繰り返されているのは、まさに神不在の、人間の悲劇です。それは具体的に言うならば、一つの家族の崩壊の有り様です。」

(日本基督教団横浜指路教会・藤掛順一師)。

[1] とんでもない話

確かに、今日の物語は、既にご存知の方も多いと思いますが、読みやすいということもあって、サラッと読んでしまいがちですが、よく見ますと、とんでもない話なのです。ここにあるのは、兄弟間の不和と憎しみ、集団心理による一人の者へのいじめ、殺意、また、父親を騙す工作です。読んでいて気持ちの悪い要素はどこにもありません。

特に 18 節から 20 節は生々しいですね。こうあります。

「兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフ

を殺してしまおうとたくらみ、相談した。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えよ。あれの夢がどうなるか、見てやろう。」

「あれを殺してしまおう」と相談したと言うのです。場所は寂しい野原です。野原と言うとあの創世記 3 章にある、人類最初の殺人（兄弟殺し）、カインによるアベルの殺害の出来事を思い起こさせます。その後創世記は、アブラハム物語、またイサクの物語、ヤコブの物語と続くのですが、それは族長物語であり、また「信仰の継承」の物語でもあったはずですが、しかし、このヤコブの息子たちが立派な信仰を持っていたというところは無いに等しいです。その意味では、御使いと組み打ちまでして神様の祝福を得たヤコブ（32 章）でさえも、自分の子どもにたいする教育、ことに信仰の継承というのは困難だったとも言えます。このことには、私は慰められる気が致します。

[2] 「自己正当化」は自分を神とすること

しかし、「あれを殺してしまおう」という考えは穏やかではありません。このことについては、ちょっと私は立ち止まりたいと思いました。少々極端なことを言うようですが、**私たちが人を殺さないのは何故でしょうか？** 程度の差こそあれ、「憎しみ」の感情を持たない人間はいないと思います。「あいつの顔など見たくない」という気持ちです。それが高じて殺意に変わるような場合、本当の意味でそれを止めるもの、制止するようなものを人間は持っているのでしょうか？「**理性**」でしょうか？「**意志の力**」でしょうか？ヤコブの息子たちは結束して弟を亡き者にしようとしてきました。（結果的に殺しはしませんでしたけれども、それに等しいことをしました）。人間は、自分の心にだけ従っていたら、いとも簡単に他者を抹殺しようとすることがあるのではないのでしょうか？それではこの世界が続いていきません。ですから抑止力として「**法**」が出来てきたのだらうと思います。しかし、この当時はまだモーセの「**十戒**」さえも与えられていなかった時代です。むき出しの人間の心というものがそのまま描写されているような気が致します。

先ほど、この 37 章には「神」という語が出てこない、ということをお話しました。それは象徴的です。この兄たちの殺意、弟を消してしまいたいという思いは、「**神なき世界**」の物語のひとつコマだと言っても良いのではないのでしょうか。「神なき世界」の悲劇の話がここにはあるのです。聖書は、人間を楽観的には見ていないのです。「生まれながらの」と言って良い「**罪**」が人間にはあるのです。これは、**真の神様との関係でしか解決されないもの**なのです。

しかしこの「神なき世界」とも思える物語は、兄たちが思っても見なかったよう

な展開を見せることになります。兄たちはギリギリのところまで弟を殺すことをせずに済みましたし、この弟ヨセフがエジプトに連れていかれたことが、**やがて自分たちをも、父をも救う**ことになっていくのです。実に不思議です。それはあのヨセフの「夢」の通りになったということです。当時は、夢とは、神様がご自身のご計画を示す、ということがありました。「神」という言葉こそ出てきませんけれども、神様がいない、というのではないのです。いや、むしろ**大前提**として、人間の理性や或いは企みを超えて、**神様が主権を持ってご自身のご計画を遂行される、それが「夢」で現されました。**ですから、兄たちも、父ヤコブのように、そのヨセフの夢を「何のことか、神は何を示そうとされているのか」と思い巡らせば良かった。けれども、自分の憎しみの心に従ってしまった。

悪を企む時、人間は待つことが出来なくなり、**冷静さを欠いてしまう**のだと思います。兄たちのやっていることは、その時の、エジプトへ行く隊商がやってきた状況にもこれぞと乗ってしまい、更には、自分たちのしてしまった罪を覆い隠すために工作をすることになってしまっています。先週もお話しましたがけれども、兄たちは**全く「シャローム」が、平安がない状態**ではないでしょうか。兄弟揃って父に**ずっと嘘をつき続けなければならなくな**ってしまいました。

兄たちは、「罪」を正当化しているのです。正当化出来ると思っているのです。しかし、それは無理です。人間との間では「この怒りは当然」などと思ってしまうのですが、それがこの世界から戦争がなくなる原因だと思います。私たちの中に潜んでいる、**戦い、争いを正当化する心**が戦争を生み出していると、私は自分自身の心をも吟味しながら思います。「自己正当化」というのは、とどのつまり、自分を神様とするということ、「神などいない」と言いながら、自らを神としてしまうことではないでしょうか？

[3] ヨセフの姿と詩編 22 編

この兄たちの姿と対照的なのが**ヨセフの姿**です。ここでヨセフの言葉というのは、彼が穴に投げ込まれた後、ひと言も記されていません。それだけに色々と想像を駆り立てられます。沈黙しているような描写ですが、恐らく様々な思いが交錯していたに相違ありません。思っても見なかった仕打ちを受け、自分を愛してくれる父親から引き離され、独りエジプトに連れて行かれる…。

私はあの有名な詩編の 22 編の言葉を思い起しました。ヨセフの心は、あの詩人の心と同じ深い嘆きがあったのではないのでしょうか？ 22 編 2 節の言葉です。

「わたしの神よ、わたしの神よ **なぜわたしをお見捨てになるのか。**

なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず 呻きも言葉も聞いてくださらないのか。」

「神様に見捨てられた」という思いほど絶望的なものはないと思います。それこそほら穴ではありませんけれども、**全くの闇**だと思います。ただ自分がその中に沈んでいく、こんなに恐ろしいことはありません。しかし、その中でも人は神様に問うのですね。いや、問わざるを得ないのです。他に自分の思いを、絶望をぶつける相手がいないのですから。「わたしの神よ、わたしの神よ **なぜわたしをお見捨てになるのか**」と。22 編 3 節には、「わたしの神よ、…(あなたは)呼び求めても答えてくださらない。」と激しく訴えています。

しかし、この 22 編は、不思議な詩編なのです。それまでの嘆きが、23 節からは讚美に変わるのである。この詩編の後半、23～25 節をお読みしますと、「わたしは兄弟たちに御名を語り伝え 集会の中であなたを賛美します。主を畏れる人々よ、主を賛美せよ。ヤコブの子孫は皆、主に栄光を帰せよ。イスラエルの子孫は皆、主を恐れよ。主は貧しい人の苦しみを 決して侮らず、さげすまれません。御顔を隠すことなく助けを求める叫びを聞いてくださいます。」となっています。

[結] 嘆きが讚美に変わる人生

誠に不思議なことですが、神様は、ある意味ドロドロの人間の罪の歴史を用いてでも、それを貫き、それを超えて、時至り、ご自身のわざを進められるお方なのです！ これから先のヨセフの生涯は、そのことのモデルです。人間の罪ではなく、神様の憐みが、赦しが勝利するのです！ これは旧約聖書の物語ですけれども、そのことをハッキリ示してくれたのが**主イエス・キリスト**です。イエス・キリストは、この詩編の祈りを十字架上でご自分の祈りをして下さいました。旧約学者の**ヴェスターマン**という人は、「キリストは 22 編の嘆きをご自分の嘆きとした。この地上を歩まれたイエスの職務は、嘆きを讚美に変えることであつた」と言いました。

主イエスが知らない嘆きというものは、最早この地上に無いということです！ 私たちはもう「神様がいない」などと言わなくても良い。主イエスが**私たちの嘆き**を共に背負い、**私たちの罪や過ち**も、私たちが負えるほどちっぽけなものではないので、神の独り子イエスが肩代りして下さいました。それがあの**十字架**です。あの十字架を見上げて、私たちは感謝の讚美を捧げるように招かれているのです。これは神様がして下さいましたみわざ以外のなにものでもありません。

ヨセフは決してこれからも楽な人生ではありませんでした。けれどもこの**ヨセフと神様は「共におられた**」というのが来週以降の箇所です。そして、それは**今の私たちも全く同じ**なのです。感謝したいと思います。

お祈り致します。